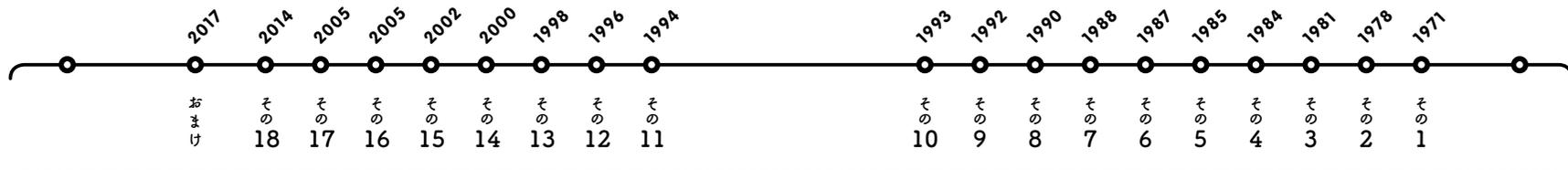


涙の数だけ、愛を知る

女優 池谷のぶえ





はじめに … 2

生誕〜幼稚園編 … 8

小学校低学年編 … 14

小学校高学年編 … 22

中学校前編 … 31

中学校後編 … 39

高校前編 … 47

高校後編 … 56

大学前編 … 63

大学中編 … 72

大学後編 … 81

猫ニヤ〜編 1 (1994年〜95年) … 89

猫ニヤ〜編 2 (1996年〜97年) … 97

猫ニヤ〜編 3 (1998年〜99年) … 106

猫ニヤ〜編 4 (2000年〜02年) … 114

猫ニヤ〜編 5 (2002年〜04年) … 122

旅人編 1 … 131

旅人編 2 … 139

最終回 … 150

おまけ

池谷のぶえ、
現代の男子校演劇部に出会う
池谷のぶえ×筑波大学付属駒場高等学校演劇部員座談会 … 158

あとがき … 174

廣作 女優 池谷のぶえ
～涙の数だけ、愛を知る～
もくじ

その① 生誕〜幼稚園編

一番最近、涙を流したことといえば、この文章を書いているつい数日前まで、人生初の急性声帯炎を患い5日間全く声が出なくて、泣いた。

皮肉にも、あと10日ほどで舞台の本番という状況である。

初めて経験する病なので、いつ声に戻ってくるかもわからない。初日までに戻ってこないかもしれない。そんな、この先どうなってしまうんだかまるでわからない中、何度となく願ったのは「お芝居…やらせて下さい」という想いであった。まさか、自分の中にそんな願いの小部屋があるうとは思ってもみなかった。

正直、お芝居を取り巻く世界が苦手だ。自分にまるで合っていないと思っている。そもそも、好きで始めたことではないし、自分にとって叶えたい夢でもなかった。そんなお芝居を、やらせて下さいと、いるんだかいんだかわからない神様に願う日々。

はあ…ようやく自分の人生にとって、大切な存在になってきたのか…と、声を失うことによって気付かされたのだ。

「贗作 女優／池谷のふえ　く涙の数だけ、愛を知るく」は、そんなまるで願ってもいない世界に、知らないうちにとっぷり浸かるはめになり、常に自分がいる場所じゃないと思いつながら、流され、流され、ただただ流され、時にやる気になり、その反動で全くやる気がなくなり、また流され、流され、漂い続けてきた、池谷のふえのお芝居半生記である。

まず最初に確認しておきますが、興味ないでしょうか？

あたしだって、大してないよ。

まず、自分に興味ないもの。

でもこれを偶然目にしてしまったのは、何かの必然ね。

あきらめて毎月読まないで、台所の蛇口がちょっと締りが悪くなるという微妙に嫌な仕打ちをしますからね。

さて、池谷のふえは1971年5月22日、母の実家足立区で生誕。

父と、母方の祖父の協議によって「伸枝」と命名される。

私は「伸枝」という名前をずっと、「伸びる枝」だと思っていた。

その割には何にも伸びねーな。とも思っていた。

そして、本当について数年前の何でもないある日、

「伸ばす枝」ってこと!?

ということを見つけた。

「勝手に伸びるわけないだろ。自分でどうにかしろ」という名前だったのだ。

愕然とした。自分の人生、誰が助けてくれるわけでも、魔法をかけてくれるわけでもないのだなということに。

もともと、「伸枝」という字体も、「のぶえ」という響きも、好きではなかった。幼稚園で、「お友達の名前を使って、言葉をつくってみましよう」という授業があり、例えば「やまだちかこ」ちゃんだったら「まち」など、ひらがなを拾って言葉を見つける勉強である。

その際、とある子が「いけたにのぶえちゃんの名前で…ぶた!」と、高らかに発表したのだ。

もちろん子どもだから、笑う。発表した子は、みんなが笑ってくれたことで誇らしげですらある。私も、体裁をつくろって笑う。

初めて経験した地獄であった…。

「ぶた」と言われたことよりも、こんなになんかで笑い合わなければならないこ

と?という人間世界の歪みを初めて感じたことがショックだったのかもしれない。

そして数日後、朝起きて雨戸をあけたら、庭にぶたがいたのだ。

近くの養豚場から脱走してきたらしい。

二度目の地獄であった…。

もう、私は本当にぶたなのではないか。

だから名前のなかに「ぶた」という文字が入っているのではないか。

本当のお母さんが迎えに来たのではないか。

本当のお母さんが見つけやすいように、名前の中に「ぶた」という文字が…「ぶた」と「本当のお母さん」を行ったり来たりしながら、もんもんとした日々。

その頃からだろうか、台所のイスに布を掛けてテントのような状態にしては、そこだけが自分の家だと妄想し、そこより外はいつも雨が降っていて出られる状況ではない…という、果てしなく暗い遊びを毎日していた。

ええ、もちろん一人でな。

そして「ぶた」事件から、「のぶえ」という名前がすっかり嫌いになり、「エミリー」という名前だったらよかった」と、妄想するようになる。

思えばこの頃からすでに、自分を嫌いはじめていたわけだ。

それから現在に至るまでずいぶん年数、自分を嫌っているわけである。なかなかライフワークだ。

【自分を嫌いになる↓エミリーになりたい↓自分とは別のものになりたい】という公式は、その後すぐに活性化していくことになる。

幸い近所の幼稚園たちは男子ばかりだったので、ヒーローごっこなどをする際は、おのずとヒロインが巡ってくる。これはなかなか気分のいいものだ。そして、

【「のぶえ」でない時は、気分がいい】

という新たな公式が加わる。

そうしてしばらくはエミリー気分を過ごしていたが、幼稚園でほとんど交友関係が広がっていくうちに、エミリーなポジショニングが崩壊していく時がやってくる。

私より、エミリーらしい女子たちの登場である。

そう、世の中には無数の女子がいるのだ。ましてやベビーブーム。半端なく女子がいるのだ。

そのうち、無数の女子たちによりヒーローごっここのヒロインは奪われ、ピンクレディごっこをしようにも、やりたかったミーちゃんの役を奪われ、ままごとで

は子どもの役を奪われ、あれよあれよといううちに、なぜか無数の女子たちのサポート的ポジションへと流されて行くのである。

そんな雰囲気は大人たちにも的確に伝わるようで、人生初の舞台経験になる幼稚園の発表会では、年少さんで「みにくいアヒルの子」であひるの子を見守るお月様、年長さんで「ハーメルンの笛吹き男」のナレーターと、サポーター力ばかりを求められるようになるのだ。

見てくれ、このやる気のないナレーターぶりを。

ある意味、何の気負いもなく舞台上に立っていると
いう意味では、いまよりも数倍素晴らしい居方な
かもしれないが。



しかし、エミリーの時代はもう二度と戻ってこない…幼心にもそれははっきりと実感できた。

そもそも私はエミリーではない、嫌いな「のぶえ」でしかないのだと。